

ONSA ニュース

No. 32-3

発行 2023 年 1 月 6 日

巻頭言 原子力・放射線への理解促進に向けて	1
第 31 回放射線利用総合シンポジウムのご案内	2
開催記録 第 77 回放射線科学研究会報告	5
ONSA からのご案内	6

巻頭言 原子力・放射線への理解促進に向けて

元近畿大学教授 ONSA 参与 鶴田隆雄

2023 年を迎えた。世界では戦争や紛争が絶えず、温暖化による気候異変が頻発し、またコロナ禍もいまだ終息せず、なかなか将来に希望が持ちにくい状況にあるが、大局を見つ、身近なところから変革の努力を続ける年にしたい。

原子力復調の機運が到来しつつある。政府は、既設炉の運転期間の延長を図り、新規開発炉による建て替えの推進にも舵を切ることにした。この背景には、昨今の円安・資源高で我が国の貿易収支の赤字が増大し、電力のひっ迫によりたびたび節電が要請されるようになって、国民がようやくエネルギーの問題を真剣に考えなければならなくなったことがある。既設炉の活用や炉の建て替えには立地地域の理解が不可欠で、そのためには、地域住民が安心感だけでなくエネルギー供給の意義と誇りを持てるような施策が必要になる。

放射線の医療等での応用については多くの国民が認識しているところであるが、一方、放射線被ばくに対する過度の恐れは拭い去られていない。原子力・放射線に携わる者は、先ず周囲から信頼される存在であることが前提、その上で国民の原子力・放射線に対する理解が一層深まるよう、家庭教育、学校教育、社会教育の場により積極的に関与するようになりたい。原子力・放射線に携わる者を養成するための専門教育の充実が今後ますます重要になるが、その教育は、実物に触れてなされるものでなければならない。大学における関係実験施設の減少の問題が長く指摘されてきたところであるが、「もんじゅ」サイトに新設される試験研究炉は、新たな原子力・放射線教育の場の創造という意味でも意義あるもので、その早期の運用開始が望まれる。